



ピクタインダカン

(おきみがりにぼし)

第14号

発行日 2018年5月1日

発行人 矢代 しず

秋田市御野塩7-1-29-305

象

目の前のアフリカ土産の木彫の象

2・5kgの茶褐色の体に小さな瞳

サバンナから海を渡って

はるかな日本へやってきた

20万年前の血を引く

コートジボワールの芸術家は

いまも木のなかに埋まっている動物を

掘り出しているのだろうか

野性を生きる現地人は

5までしか数えられないというが

幸福な情景かもしれない

電化製品で満たされていても

不毛の大地でわたしは

人間の寒さに震えている

濁黒 (KURO) III

凍った空から
再生の明日へ

当事者でさえも

予測不能の

特異な事故に

遭遇してしまつた

刻印された黒い記憶を

今日から濁黒ククロと名づけよう

感情に囚われない

理不尽さに怯まない

空虚に支配されない

苦しさに臆病にならない

なによりも

おまえに喰い殺されないうために

今日から濁黒と名づけよう

ここに宣言する

*

わたしが倒れた忌まわしい

五月二十一日

黒い記憶に拘泥してしまふ

五月二十一日

嘘の澱を洗い落とせない

五月二十一日

膨張する濁黒を追い払えない

五月二十一日

精神に彫られた刺青を消せない

五月二十一日

ひび割れた魂を恢復できない

五月二十一日

曆から抹消してしまいたい

五月二十一日

*

退院後も

負の連鎖がつづき

艱難に堪えることが

みずからの存在を明確にした

濁黒に脅かされるたびに

わずかな希望も

花開くことなくしぼんだ

痺れ 痛痒 目眩 脱力 吐き気 胃痛

繰り返かえず症状が

容赦なく襲う

錆ついた膝は

みずからの重みで簡単にくじけた

我慢ならない痒みは

薬や注射でも治まらず

日ごとに悪化していった

皮膚の不気味なまでに腫れて連なる赤

掻きむしる爪は棘となり

下着に血痕の花が咲いた

やがて

肌は

灰黒色の凍土のように

深刻な痕跡を残した

*

歪められた壁に

白の絵の具で

かなしみを描く日々

停滞した空気が

重い

*

通院途中

とある駅で

会社の同僚と出会う

逃げろ！

(なんで敵視するの)

彼女の寒風のことばを

ふりきる速さで

わたしは去った

昏く沈んだこちら側は 濁黒にとらわれたまま

あちら側には意気軒昂たる活気

いったいどこまで行けば

絶対の場所へ辿りつけるのだろうか

*

人が投げつける

重い言葉

さらに

はげしい飛礫が

魂をたたく

*

精神が水のように逆流する

夜半

雄物川の岸边に立つ

木賊色の水面に月がゆれている

半歩進む……

できない

水面にうつる月が

死を

きっぱり拒否する

*

町をさまよう

白い駅から

黒い町へ

途中

翳がゆるるトンネルに

濁黒だ

離れる！

すぐさま

下車

*

会社から

一通の手紙がとどく

貼られた切手に

慄然とする

縦 2 cm

横 2.5 cm

の四角のなかに

忌まわしい建物が写っていた

*

暗翳と記憶のあいだで

傾いたところの縁に

こわばる表情の波が押しよせる

卵一個も買いに出れない

自由を喪失した日常

視野が狭窄していく

閉じこめられた堅牢の窓から

わずかに覗く空をながめ

自由を想像する

盲のようにふさがった

こころの眼が

解放を唱えるようにささやく

風の音をきいている

*

風にのって

野望者の声が聞こえてくる

空々しい権力の声が近づいてくる

どんなに

魂の扉を閉めても

こじ開けて入ってくる

スピーカーの音は

鼓膜を突きぬけ

頭蓋骨に響き

魂を小刻みに震わせる

*

真つ黒な記憶に

刻まれた時間

人生の指針が狂い

わたしが反転する

融解する真実のあいだで

わたしは混沌の闇に捕らえられた

*

獄舎につながれた

痩せ細ったわたしを

組織の人間は

だれひとり見ていない

切り捨てられた

わたしは

突破口のないあしたを

生きるしかない

*

灰暗い解剖室の

ホルマリン溶液のなかに

白い腹を上にした

標本

わたしも

鎖のような液に

縛られて

水がね色の瞳に

あきらめを映している

*

追いつめられ

それでも

やるせなさが憤怒となり

わたしのなかの抗う波が

川下から川上へ

逆流する

わたしの心に

事故の真実を質す気持ち

憤りが生まれた

*

解決の扉をもとめ

法を守る番人の

重い扉をたたいた

兜のような制服を着たひとの

悲しい志操は

わたしの石の信念を

簡単に砕いた

わたしの魂をもてあそぶ

彼の華麗なことばは

鉛の弾となって

わたしの胸に突き刺さった

*

苦しみにはやさしくかたむく秤はあるのか

銀色の天秤は

いかなるときも

公正と平等をかかげ

しずかに水平の位置を保つ

と信じていた

が

金バッジはあらぬ方角を見ていた

事実確認どころか

相手が偽政者と知ると

わたしの知らない言葉で

断りの理由を口の端でころがした

まっすぐな竿の肩は権力のおもさに傾き

正義は均衡をうしなつた

矛盾した瓦礫のことば

理不尽な説明

わたしの自尊心は

灰のように空中に浮遊し

心に悲しみとなつて堆積した

*

わたしの前に立ちほだかる

巨きな岩の壁

爪を立ててひっかいても

相手は無傷

許せない

不条理

巨岩に挑む気概は

積憤のマグマ

*

組織と個人

権力と抵抗

偽と真

ためらわず振りおろす斧でも

わたしの魂を

欠かすことはできない

なにを信じればいいのか

どこに向かつていけばいいのか

眞実は……

*

分厚い活字の標本には

悲しい蝶がうすみどりの翅を十字にひろげ

ちらばっている

蝶には顔がなく

自由を奪われた 弱者の

満たされない 無念が漂っている

失われた すべてのもの

すべての 傷ついたものの姿をさらせ

占領された場所を取り戻せ

傷ついた魂に生を呼び込め

屈辱の石を蹴飛ばせ

永遠に顔を上げよ

そして

失った自分の

棲む場所を見つけよ

【詩の勉強会】

去る四月十九日（木）、あきた文学資料館において、「第三回 ピッタの会」を開催した。

当初は講師に若木由紀夫氏を予定していたが、ご都合によりお迎えできなくなりました。

そこで急遽ピンチヒッターとして、わたし矢代レイが進行を務め、若木氏推薦の荒川洋治の詩「美代子、石を投げなさい」を取り上げ、順次進めていった。

参加者は十三名。はじめての方が三名であった。

- ①参加者の自己紹介
- ②「美代子、石を投げなさい」の鑑賞
- ③朗読
- ④意見交換

☆感想

- ・長詩だけど面白い
- ・勉強会を大切にしたい
- ・いろんな人と知り合えた
- ・口の字型のセッティングが良かった
- ・自己紹介で会の雰囲気がかめた
- ・朗読を聞いて前向きになれた

*

一夜漬けの詩の勉強会ゆえに、参加者は物足りなさを感じたと思われる。

詩を学ぶ機会が少ないなか、意見交換することに参加者の人となりが分かり、今までとはひと味違う勉強会となった。ほんとうにありがとうございます。充実した時間を過ごすことができました。

*

うぶな氏（越後谷信義氏）からピッタの会に、胡蝶蘭「リトル・ワルツ」をいただいた。写真にその優雅な姿が収まっている。軽快に踊る舞曲のように詩をうたいあげてみたいものである。「みんなとしゃべる時間が楽しい」と話してくれたいうぶな氏。心からお礼申し上げます。

*

若木氏のお話を聞きたいとの声が多くあり、改めて若木氏には来年講演をご依頼したいと思いません。次回は九月を予定しております。

*

こんな声も聞こえてきた。

大詩人の威コネを借りる似非詩人がいる
「美代子、似非たちに石を投げなさい」



徒然のエチュード XII

【あとがき】

1 「農薬を一切使用していません」
わたしと同じ
この白きくらげ

2 贅沢にコーティングした
苺チョコレートケーキ
わたしの場合は
歳月でコーティング

3 厳選された豆で入れたコーヒーは
旨くて当たり前
安い豆でも
愛情次第！

「記憶の蓋は開けないほうがいい！」と、不調つづきのわたしに、医師が忠告した。「濁黒」を書くことは、石棺に封じ込めたみずからの魂を無理やり外へ連れ出すようなものである。

しかし、十六年もの間、わたしの魂に巣くってきた濁黒を、いま沈黙を破り書くことで、濁黒の呪縛を解けるのではないかと考えたのである。

わたしは不可視なものに翻弄されてきた。不条理や不埒をまっすぐ言葉で書き表すことにより、封印してきた感情が憤怒としてわき上がったのである。

背負ったものはどうにもならないが、真実の詩を書きつづけることで、わたしは回生できるのではないかと信じている。

